

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 142

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 2821. 肌寒さと道化師の踊り
- 2822. その都度の振り返り:不協和音の響かせ方
- 2823. 不協和音とスカイブルーの空
- 2824. 印象派の絵画作品とデッサンについて
- 2825. 晴れ渡る早朝より
- 2826. 工事の進展と作曲における問題意識
- 2827. 問題意識を涵養する手立てとGRE試験
- 2828. 浜風吹き抜けるフローニンゲン:論文の加筆修正の終了
- 2829. テレマンの曲とGRE対策
- 2830. 二つの特徴的な夢
- 2831. 四つの活動とABNアムロ銀行について
- 2832. コーヒーの入れ方と生き方
- 2833. あるゲームの終わりに向けて
- 2834. 世間・肉・詩的言語について
- 2835. 投資と霊性
- 2836. 小さな創造物の堆積
- 2837. 論文の最終修正の完了
- 2838. ウィリアム・ブレイクの作品に関する印象的な夢
- 2839. バッタと「それ」
- 2840. クリシュナムルティの教育思想:脳の包括的な活用と自己との一体感

今日は本当に肌寒い。空を覆っている雲のせいもあるだろうが、今日の体感温度は七月のそれだとは思えないほどである。

外面世界の肌寒さと内面世界のそれが呼応することもあれば、呼応しないこともある。今日は幾分前者だと言えるだろうか。

外側の気温が肌寒いことによって、自分の内側にもどこか冷たい感情が流れている。午前八時を迎えた今時点の自分の状態はそのように形容できる。六月に一度気温が上がる日が少し続いたことがあったように記憶しているが、今となってはそれが嘘のようである。フローニンゲンも夏も最高気温は20度前半であることをもう一度思い出す必要がある。

昨日よりも少しだけ明るさがあるが、まだ太陽の姿を完全に把握することができない。昼食前にランニングに出かける時まで、空を覆う雲がもう少し晴れてくれればと思う。

当初の予定では近所のノーダープラントソン公園へランニングに出かける予定であったが、ランニングコースを変更し、近所の河川敷を久しぶりに走るのもいいかもしれないと思った。その道は、以前研究インターンの際によく通っていた道であり、その道を辿っていけば、ザーニクキャンパスに辿り着く。今日はいつもより多く走りたい気分であるから、そのコースを走ることにしたい。

つい先ほど過去に作った二曲の編集を終えた。ここ最近は毎日三曲ほど作ることが習慣になっているため、日記と同様に、気がつかないうちに未編集のものが次々に溜まっていく。今日編集をした二曲はおよそひと月前に作ったものだ。毎朝過去に作った曲を聴くことは密かな楽しみの一つである。というのも、自分が作った曲がどのようなものであったかを忘れていたものも少なくなく、いつも早朝に曲を改めて聴いてみた時に、過去の自分がそうした曲を作っていたことに驚かされることがよくあるからだ。

また、本当に毎日異なる曲を生み出していることにも改めて驚かされる。一つとして同じ曲がないことは、自己の内側にある創造の源がいつも異なる形を生み出していることを示唆している。毎回のデッサンと共に、毎回の作曲は絶えず異なるものを形としてこの世界に創造しているのだ。ここに創

---

造の不思議さが宿っている。それは即、人間存在の不思議さとも繋がってくる。毎日毎日異なるものを生み出し続ける人間の内面世界。創造空間の豊穡さには本当に驚かされてばかりである。

今朝方に聴いていた曲は、どこかこの世界の諸々の物語が道化師の踊りのように思えることを喚起するものであった。この現実世界で構築されている物語の外に出てみると、その物語の様々な事柄が見えてくる。まず最初に知覚されるのはその虚構性だろう。虚構性を知覚した後に再度その物語を眺めてみると、実に微笑ましいものもあれば、嫌悪感を抱かせるものもある。それらは決して物語の世界と同一化しては見えないものであり、感じられないものだ。

今日これから作る曲はどのようなものを喚起させてくれるだろうか。それを一つの楽しみとして、これからモーツァルトの曲に範を求めて一曲作る。フローニンゲン:2018/7/11(水)08:30

#### No.1127: Old Memories

I've recently recollected old memories quite often. Our unconsciousness is rife with ample memories, though those memories might be both positive or negative. Groningen, 09:07, Thursday, 8/16/2018

#### 2822. その都度の振り返り:不協和音の響かせ方

起床時から続く曇り空に一向に変化の兆しが見られない。早朝の予報では少しずつ晴れ間が広がってくるとのことであったが、再度予報を確認すると、曇りマークが付いたままである。今日は曇り空の中をランニングすることになりそうだ。

これから少しばかり過去の日記を編集し、それがひと段落したらランニングに出かけたい。午後からは昨夜の計画通り、論文の最終修正に着手し始める。一度提出したと思った論文が手元に戻り、再度論文の修正をするのは少しばかり億劫だと最初は思っていたが、今はだいぶ気持ちが違う。やはり納得のいく良いものを提出したいという強い気持ちが自分の中に湧き上がっている。

ちょうど今日の意識はどこか構成的であるので、論文の文章を組み立てていくには最適だと言える。こうした構成的な意識を日々高めてくれるのはもしかしたら作曲実践やデッサンのおかげかもしれない。特に前者の作曲実践の恩恵は計り知れないだろう。

---

作曲のプロセスそのものは多分に構成的であり、一つ一つの音をある総体にまとめ上げていくことが要求される。確かにモーツァルトを含め、一部の天才的な作曲家の場合は最初から全体が自己の内側にあり、それを曲として形にしていくだけの場合もあるが、私の場合は部分から全体を組み立てていくという方向性の方が強い。もちろん、曲を作ることに着手する瞬間に、自己の内側には何かしらの全体がすでにより、それが一旦部分的な形となって外側に流れ出し、のちに全体に形取られていくという風に考えることもできる。

先ほど一曲ほどモーツァルトに範を求めて曲を作った。作曲の一つ一つの体験は自分にとって一回の旅と同じくらい貴重なものであるから、作曲実践をした都度、短くてもいいので振り返りを行っていききたいと思う。こうした地道な振り返りがいつか大きな建築物を生み出す技術を涵養していくはずである。

参考にするモーツァルトの曲の楽譜を眺めていると、これまでの私があまり試したことのない音符の並べ方をしているものを発見した。和音を構成する際に、私は隣接する音符を組み合わせることをこれまでしていなかったが、モーツァルトが隣接する音符の組み合わせを巧みに響かせていることに気づいた。確かにこれまでも他の作曲家の楽譜で何度もこの組み合わせによる和音を見てきたが、これまではあまりそれを意識したことはなかった。試しにモーツァルトが行っていたように、隣接する音符の組み合わせで和音を作ってみたところ、不安定な響きとして聴こえた。

こうした不安的な音、つまりある種の不協和音をいかに綺麗に響かせるかについてはまだまだ学びを深めていかなければならないと改めて思わされた。実はこれを実験する際に、曲の文脈と切り離して、余白の小節にその音の組み合わせを並べて聴いてみただけだったので、不協和音が綺麗に響くか否かは曲の文脈、つまりハーモニーをいかに構築するかにかかっているのかもしれないと思った。ここからしばらくは不安的な音をいかに巧みに曲の中に組み入れていくかというテーマを設定したいと思う。

最後に、モーツァルトの原曲とは異なるテンポで曲を作ってみたところ、完成した曲と原曲の印象は随分と異なることに気づいた。メロディー、リズム、ハーモニーのみならず、テンポというのもやはり重要な要素だということを改めて思う。

---

午後に論文の修正に目処がいたら再び作曲実践を行おうと考えており、その際には上記で述べたことを強く意識し、曲を作り終えたらまた振り返りをしたいと思う。一つ一つの作曲体験は旅の体験と同じであることを肝に銘じる。フローニンゲン:2018/7/11(水)10:49

#### No.1128: Sky

It is cloudy all day long, but I can see a light-blue sky in the distance. Nature always discloses mysteries for us. Groningen, 08:32, Friday, 8/17/2018

### 2823. 不協和音とスカイブルーの空

不協和音を巧く響かせる技術をまだ持ちえていないが、それを恐れて一向に不協和音を曲の中に組み入れないというのでは技術の向上は見込めない。不協和音を曲の中に盛り込むというのは、文章の執筆で言えば、どこか耳に痛いことを指摘することに似ているとふと思った。そう思った瞬間に、これはなかなか面白い比喻だと思われた。確かに、耳に痛いことを指摘する文章というのは文字通り痛切な何かが体現されている。

曲における不協和音というのもまさにこうした一見すると耳に不快感を与える類の音なのだろう。しかし、耳に痛いことを指摘することが時に非常に重要であるのと同じように、不協和音というのも時になくってはならない存在なのだと思う。

何かに刺さっていくような批判的な見解がないような文章はとても優等生的ではあっても、往々にして面白味に欠ける。それと同じように、調和の取れた協和音だけの音楽も面白味に欠けるのだろう。そのようなことを考えていると、やはりこれからの自分に求められているのは、不協和音をいかに曲の中に表現していくかという点である。不協和音を組み込む塩梅を実践を通して学んでいき、いかにそれらを組み込んでいくかの技術を高めていく。不協和音というテーマはこれからより一層意識していきたい。

昼食前から晴れ間が広がり始めた。天気予報を一度疑ってかかったが、やはり予報通り天気が回復してくれたことを嬉しく思った。幸運にも、ちょうど太陽がで始めた時にランニングに出かけることができた。計画していた通り、近くの河川敷沿いのサイクリングロードを走った。気温は暑くもなく、ランニングには最適な天候であり、足取りは非常に軽かった。

---

現在は、毎朝ヨガを行い、週に一度はランニングを行うようにしている。ランニングや散歩がてらに近所のスーパーに買い物に行かない日は、夕方にもう一度ヨガを行うようにしている。

ちょうど先ほどランニングから戻ってきたが、やはり体を動かすことは心身を整える上で最良の実践だということを改めて思う。これは不思議なことに、ランニングに出かけるたびに思う。ある意味、こうした実感が週に一度のランニングを確かな習慣にしているのかもしれない。心身のつながりについては探究する余地がまだまだ沢山ある。両者のつながりの重要性については強調しても強調しすぎることはないだろう。

現在、日々の探究活動と創造活動に打ち込んでいるのは、間違いなく健全な肉体があるからだ。肉体が不健全なものであれば、それらの活動に真に打ち込むことはできないだろう。継続的にある一定以上の投入量を持ってそれらの活動に従事するためには、身体を鍛錬していく必要がある。それを忘れてはならない。

フローニンゲンの空に青色が戻ってきたことはとても嬉しい。早朝のキャンバスには灰色が多く割合を占めていた。今はすっかりと灰色がなくなり、スカイブルーの空に薄く白い雲が少しばかり浮かんでいるだけである。爽やかな風が街路樹の葉を揺らしている。街路樹の葉の表情を眺めていると、どうも嬉しそうに微笑んでいるように見える。空を舞う鳥たちも昨日以上に元気に見える。さて、これから過去の日記を少しばかり編集し、仮眠を取った後に論文の修正に着手したいと思う。フローニンゲン:2018/7/11(水)12:41

#### No.1129: Reciprocal Relationship between Nature and the Self

The brighter the sky becomes, the more pellucid my mind becomes. I can find the reciprocal relationship between nature and the self. Groningen, 08:45, Friday, 8/17/2018

#### 2824. 印象派の絵画作品とデッサンについて

ロンドンのナショナル・ギャラリーで見たモネの特別企画展に影響を受けてか、ここ最近は抽象主義的な絵画作品ではなく、印象派の作品を眺めることが多くなっている。抽象的な絵画世界にも相変わらず惹かれるものがあるのだが、再び印象派に戻ってきたような感覚がある。長い間抽象的な絵

---

画作品をよく眺めてきたからか、このたび印象派に戻ってきてみると随分とその見え方が変化していることに気づく。端的には、自分の魂の心象風景に深く響く感じがするのである。

先ほど、何気なしにルノワールの絵を眺めていると、作品で取り上げられている場所に自分が足を運んだことがないにもかかわらず、そこに足を運んだことのあるような感覚に囚われた。そこは実際に自分が足を運んだことのある場所であって、呼吸をしたことのある場所だという感覚がしたのである。この現実世界の私はそこに足を運んだことなどないのであるからこれは不思議だ。印象派の「印象」というのは、もしかすると魂の原風景における印象なのではないか、という考えが浮かんでくる。

魂の原風景は万民に共有されている普遍的なものであるがゆえに、現実世界の私が実際にその場所に行ったことがないにもかかわらず、どこか懐かしさを感じるのである。印象派の作品をぼんやり眺めているとそのようなことを思った。

改めて考えると、日々私は音楽を聴くことのみならず、絵画作品からも癒しを享受しているように思う。毎日日記を執筆し、それに合わせて一枚の絵画作品の写真を選ぶようにしている。自分が書いた文章によって喚起されるものにできるだけ近いもの、あるいは時に一見すると全く関係なさそうでいて実は深層的な部分で繋がっているような絵画作品の写真を眺めるようにしている。これまで何気なくこれを行なっていたが、文章を書くのみならず、それに合わせて文章によって喚起される感覚に近い絵画を眺めることは自分の感覚をさらに磨いていくことのみならず、根本的に精神の治癒に繋がっていると実感している。

こうしたことが可能になっているのも、実際の絵画作品を制作した他者のおかげである。彼らが世の中に形として絵画作品を残してくれたおかげで、私はこのように多大な恩恵を得ているのである。そうした恩恵を受けているのであれば、そのお返しとして自分も何かを形にしていく必要がある。そのような思いが湧いてくる。

日々が音楽と絵画、そして読書と日記の執筆で溢れ返り始めた。これはとても良い傾向であり、この傾向をもっとずっと極端な形にまで推し進めていく。今の状態では全くもって不十分である。やはり今は探究活動にせよ創造活動にせよ、まだまだ準備の時期なのだ。



---

自分が思い描いている生活の後ろ姿が徐々に見えてきた。今はそこに向かって愚直に歩いていく。

手元にあるノートを確認すると、今からちょうど三ヶ月前に内的感覚をデッサンする実践が始まった。今もことあるごとに、特に自分が作った曲を再度聴いている時にデッサンをしている。デッサンの技術についても独学で高めていく必要がある。肉眼で見たものを本物に似せて描く技術などいらない。なぜなら、自分が描いているのは肉眼ではなく心眼もしくは魂眼で捉えたものだけだからだ。ただし、表現により幅を持たせるためには最低限のデッサン技法を習得しておく必要があるように思う。このあたりについては良い実践書があればいいが、今はそうした書物を購入する気はない。

今はそうした書物を読むよりも作曲理論の解説書を読むことや詩集を読むこと、さらには芸術教育や美学に関する書籍を読むことを優先させたいという思いがある。次回実家に帰る機会があれば、父からデッサンの手ほどを受けようと思う。フローニンゲン:2018/7/11(水)13:15

#### 2825. 晴れ渡る早朝より

今朝はここ二日間と異なり、起床時から晴れ渡る空を拝むことができた。寝室に美しい朝日が差し込んでいる。差し込む光を見ながら私は寝室を後にし、書斎に向かった。書斎の窓から外を眺めてみると、朝日が赤レンガの家々の屋根を優しく照らしていた。今日も少しだけ穏やかな風が吹いている。街路樹の葉が嬉しそうに揺れている。

今日はこれから過去に作った曲を二曲ほど編集し、その流れを受けてモーツァルトに範を求めてまず一曲作りたい。昨日書き留めていたように、曲を作る都度その体験から得られた気づきや発見を書き留めておく。

実践をした都度の振り返りがどれほど大切なことか。人は幸か不幸か忘れることを習性にした生き物であり、振り返りをしなければ貴重な気づきや発見がどんどんと忘れられていく。仮に些細な気づきや発見であってもそれらを書き残すことによって、次の気づきや発見が生じることも起こり得る。なぜなら気づきや発見も生命力を持っており、自己組織化していくのだから。そうした特性を踏まえて、今日も作曲実践をした後にその振り返りを行う。実践中に何か気づいたことや発見したことがあれば、それをメモ書きとして残しておくこと、実践後の振り返りがしやすくなるかもしれない。

---

作曲実践が終われば、過去の日記を編集することを少々行いたい。こちらに関してもゆっくと進めていく。来週からより時間が取れるであろうから、それ以降に編集の作業量を増やしていくことにする。

作曲や日記の編集をしていると昼食どきがやってくるだろう。昼食を摂ってひと休憩したら街の中心部にある銀行に立ち寄り、その足で行きつけのチーズ屋に足を運ぶ。これは良い散歩になるだろう。今日は一日中快晴であり、それでいて涼しい気温のため、散歩にはもってこいである。

外出から帰宅して仮眠を取ったら、集中して論文の修正に取り掛かる。昨日の午後から夜にかけて集中的に修正作業に取り掛かったおかげもあり、随分とその作業が進んだ。また、修正の目処が立ったことも大きい。最初にどれだけの修正が必要なのかという見積もりを算出し、その修正を施すのに必要な時間を見積もったところ、当初の予定よりも早く修正が終わりそうだったと思った。二人の論文審査官にその旨を伝え、最終版を提出する日付を少しばかり早めてもらった。

書籍の執筆でもそうだが、論文に関しても加筆修正作業というのはある意味切りがないことでもある。納得の行くところまで修正を終えたら、それを最終版にしなければ、いつまで経っても論文が完成しない。すでにこの論文のドラフトはいくつものバージョンを重ねており、このあたりで最後の区切りをつける必要がある。論文に終止符を打ち、論文を手放すことができるように今日も午後から修正作業に集中的に取り組む。書斎の窓から見える景色がそれを常に応援してくれていることを忘れてはならない。フローニンゲン:2018/7/12(木)06:59

## 2826. 工事の進展と作曲における問題意識

自宅の前の通りの工事が静かに始まり出した。いや、実際には早朝のもっと早い段階から工事が再開されていたのかもしれない。先ほどまで作曲実践に集中をしていたため気づかなかっただけだという可能性がある。

通りの工事は緩やかだが着実に進展を見せている。工事の進み具合を見て何か特別なことが得られるわけではないが、ゆっくと着実に形になっていく様子はどこか私を惹きつける。どうやら通りの歩道はこれまでのものを残す形となり、自転車専用の道だけ大幅に手が加えられるようだ。道路の

---

表面の石板が全て外され、石板の下の土も一度全て掘り起こすような形で工事が進んでいる。今通りを確認すると、掘り起こされた土をどこかに運ぶためのトラックが動き出そうとしている。

早朝、初夏のフローニンゲンの朝の爽やかさを感じていると、どこからか水の精霊がやってきそうな気配を感じた。それほどまでに静謐な雰囲気は辺りを包んでいた。今も爽やかな風が吹いており、気温も涼しい。先ほど肌寒さを感じたので書斎の窓を閉めたままにしている。

数日前に一度雨が降ったのだが、今はそれが嘘のようだ。やわらかな白い雲がスカイブルーの空をゆっくりと動いていく。

数日前に雨が降り、それが止んだ後、この世界の全てのものが新しく新鮮なものに映った。この世界は絶えず創造を繰り返しているようだ。

日々新たなものが創造されていくのは何も外面世界だけではない。内面世界においてもそうである。日々新たな感覚が生まれ、それを言葉、絵、音として形にしていく。そうした日々を過ごしていると、内面世界における絶え間ない創造活動に気づく。

先ほど早朝の作曲実践を終えた。予定通り、モーツァルトに範を求めて曲を作った。先日考えていたように、まだ不協和音を巧く響かせることに苦戦している。苦戦というよりも、まだ目立った実験をしていないというのが正しい。

不協和音を巧く響かせるための実験をするためには何らかの仮説がいる。仮説を立てるためにはどうしたらいいのだろうか。直感的に浮かぶ仮説をまずは大切にしながらも、それだけでは仮説の質が担保されない。仮説を立てるための観点が必要になる。この観点はどのようにしたら生まれるのだろうか。それは一つには音楽理論や作曲理論に関する知識を得ることがやはり不可欠である。ただし気をつけなければならないのは、そうした知識を得ようとする際に、単に書籍を読んでも仮説に資する観点が獲得されるとは限らないということだ。

必要なのは何はともあれ実践経験であり、実践経験を基にした問題意識である。これまで多少なりとも作曲経験を積んできたため、ここからはより明確かつ具体的な問題意識を持って書物を読んでいくが必要になるだろう。

---

不協和音を巧く響かせるという課題に対してより明瞭な問題意識を持っていく。そうすれば、作曲実践と書物を往復しているうちに問題を解決していく方法が少しずつ見えてくるだろう。一つ一つの作曲実践は単に新たな気づきや発見を得るためにあるのではなく、次の課題をや新たな問題意識を得るためにあるのだということを再認識したい。フローニンゲン:2018/7/12(木)09:17

## 2827. 問題意識を涵養する手立てとGRE試験

作曲において問題意識を持つことの大切さについて先ほど書き留めたが、それは何も作曲実践だけに当てはまるのではなく、他の実践領域にも等しく当てはまるだろう。

昨日も考えていたように、例えばデッサンの技術を向上させることや芸術教育の意義に関する理解を深めるということにおいても問題意識を持つことは重要になる。突き詰めて考えると、やはり「意識」というものがどれだけ重要かがわかる。

私たち人間は多分に意識的な生き物であり、意識の重要性は強調してもしすぎることはない。もちろん唯心論に陥ることは避けなければならないが、実践を豊かにし、実践技術を高めていくためには何はともあれ意識をいかように持つかが鍵を握るように思う。そう考えてみると、教育の要諦は意識の涵養に尽きるのではないかと思えてくる。今は具体的な領域における実践について話をしていたが、意識は霊性や道徳性・倫理性とも密接に繋がっているのであるから、なおいっそうの事、意識を涵養する重要性が浮き彫りになってくるように思う。

もしかすると、日々日記を書き、内的感覚を絵や曲として形にしているのは意識の涵養実践に他ならないのではないかと思えてくる。日記の執筆、デッサン、作曲という三つの領域を考えてみた時に、問題意識を直接的に育んでくれるのはやはり日記の執筆だと実感している。

デッサンにせよ作曲にせよ、それらは新たな問題意識を得るきっかけになったとしても、それを直接的に育んでいくものではないように思える。上述した事柄に一見すると矛盾が含まれているように思えるかもしれないのもう一度言い換えると、それら三つの実践は意識そのものを涵養することに資することは共通しているが、個別具体的な問題意識を育み、それをより明確なものにしていくためには文章を執筆することが一番有益な手段のように思える、ということである。例えば、ゴッホを見てみると、彼は弟のテオへ膨大な量の手紙を執筆することによって、絵画の製作技術と製作思想に関

---

する問題意識を絶えず育み続けていた。そこに絵画を実際に描くという実践が加わり、その実践経験から新たな問題意識を感覚的に得て、それを手紙を通じて言語化し、より明瞭な問題意識へと昇華させていった。

言葉を扱う人間にとって、言葉と意識は深く結びついており、言葉の彫琢は意識の涵養へと繋がっていく。そのようなことを再度考えさせられた。

学術機関での探究に窮屈さを感じ、若干辟易していたのだが、科学の分野ではなく思想の分野において、しかもそこに実践が伴うものであれば、やはりそれはまだ私の心を動かす。

今住んでいるオランダという国はとても生活がしやすいため、今後の一つの生活拠点にしたいと考えているが、来年はやはり米国で過ごしたいという思いがある。芸術教育に関する思想的・実践的なプログラムがある大学院に存在していることを知り、その大学院に籍を置くための準備をそろそろ開始しようと思っている。正直なところもう学位はいらないのだが、学びたいと思うプログラムがまたしても修士課程のものであるため、これから四つ目の修士課程に入学するための準備をする必要がある。今回は米国の大学院に応募しようと思っており、そのためにはGREの試験を受ける必要がある。

これは六年前と四年前に何度か受けた試験だが、TOEFLとは比べものにならないほど難解な試験である。ただし、GREの試験で試される難解な単語を覚えることが私は好きであり、四年ぶりにこの試験に向けた準備ができることを内心嬉しく思っている。この四年の間に欧州で二つの修士号を取り、その期間における学術的な英語力の進展を測定するという意味においても、GREに向けた勉強を肯定的に捉えている。オランダではごく限られた場所でしか試験を受けることができず、試験会場はアムステルダムに二箇所あるだけのようだ。早速ETSのサイトから試験を予約し、八月中旬の試験に向けてこれから少しずつ勉強を進めていこうと思う。フローニンゲン:2018/7/12(木)09:40

#### 2828. 浜風吹き抜けるフローニンゲン:論文の加筆修正の終了

時刻は午後の七時を過ぎた。ちょうど先ほど夕食を摂り終え、今日の振り返りを今から少しばかりしようと思う。今日の午後は本当に天気が素晴らしく、外に出かけるにはうってつけの気候だった。実際に私は街の中心部の銀行に行って用事を済ませ、その足で行きつけのチーズ屋に立ち寄った。

---

チーズ屋の店主の女性が「今日は本当に素晴らしい天気ね」と思わず口ずさんだように、今日は初夏の素晴らしい一日を体感することができた。街の中心部を歩いている時、確かに太陽の光は幾分強かったのだが、浜風のような涼しい風が街を吹き抜けていくのを感じた。その風はとても柔らかく、それでいてほのかな冷たさを持っていた。

今日は昼食前、そして街の中心部から自宅に戻ってきて以降、論文の加筆修正を行っていた。無事に本日を持ってそれが完成した。二人の論文審査官から最後に指摘された幾つかの箇所を時間をかけて修正し、それが無事に終わったことをとても嬉しく思っている。実際のところ、日曜日の夜に最終版を提出するまでにもう少しやるべきことが残っているが、もうあれこれと考えながら文章を追加する必要はない。むしろここから求められるのは、字数制限を超えてしまった論文の文章を減らしていく作業である。明日の夕方に誤字脱字を確認しながら余分な文章を削っていく。

論文アドバイザーのミハエル・ツショル教授から以前に削除を勧められた箇所について私なりの理由からそれを削除することをこれまでしていなかったのだが、それを削除することを検討しようと思う。その他にも、幾つかツショル教授から削除を勧められた箇所があったように思うので、以前送っていたコメント入りのワードファイルを再度開きながら明日の修正を行っていきたい。また、論文の中で幾つか不要な繰り返しを行っている箇所があるので、それらについても削除をしようと思う。

現在時点においてトータルで365文字ほど削除する必要がある。日本語の感覚であれば1200-1500字ほどの削除だろうか。字数を規定以内に収めることができれば、次に取り掛かるのは引用文献リストの最終確認である。とても細かいがもう一度アルファベット順になっているかどうかを確認し、さらには文章を削除することに伴って引用していない論文が含まれていないかもチェックする必要がある。その他に行うこととしては、本文中の図表のタイトルについてももう一度見直しておきたい。タイトルがきちんと図表が指し示すものに対応しているかを確認する。

明日この作業を行えば、本当に論文が完成したと言える。ツショル教授が自分でも誤字脱字の確認をしたいと述べていたので、二人の審査官に送る前にツショル教授に最終版のものをワードで送ることにする。これでようやくフローニンゲン大学での二年目のプログラムを終えたと言うことができる。論文を提出し、あとはその評価を待つのみである。フローニンゲン:2018/7/12(木) 19:34

今日は早朝にモーツァルトに範を求めて作曲をし、先ほどテレマンに範を求めて作曲をした。どちらの作曲家も偉大なことに変わりはないが、私は改めてテレマンの曲の素晴らしさを見直している。テレマンの楽譜はしばらく前に購入していたのだが、これまでそれを開くことはほとんどなかった。一ヶ月ぐらい前からテレマンの楽譜をふとしたことをきっかけに開くようになり、それ以降折を見てテレマンの曲を参考にしている。

テレマンの曲を参考にしている時に、そのメロディーが発する何とも言えない魅力を実感している。モーツァルトのような美とはまた異なる美がそこに体現しており、今それをどのように言葉で表現したらいいのかわからない。とにかく、別種の美がそこに存在するという事だけは確かである。その美に包まれる格好で先ほど一曲を作り終えた。

とにかくこの時期はまだ古典派と呼ばれる作曲家から汲み取れるものを全て汲み取っておきたいと思う。テレマン、バッハ、モーツァルトの楽譜はすでに手元にあるが、まだハイドンの楽譜はないので、近いうちにピアノソナタやその他のピアノ曲が収められた楽譜を購入したいと思う。様々な作曲家の作品に範を求めることによって、徐々に自分なりの音楽的文体を確立していくこと。それが大切だ。

今日は論文の執筆に数時間ほど集中していたこともあり、これ以上作曲に時間を充てることはあまり賢明ではないように思っている。集中力が欠けた状態で創造活動に従事しないこと。集中力が欠けた状態で実践をしたとしても、そこから得られる気づきや発見はそれほど多くないだろう。そのため、今日はバッハのコラールに範を求めることはしない。幸いにも論文の執筆に目処が立っているので、明日はバッハの曲も参考に三曲ほど作りたいと思う。

今朝の日記に書き留めておいたが、来月の中旬に、四年ぶりにGREの試験を受ける。実はTOEFLに関しては、欧米で生活をしている時には二年に一度は受験して自分の英語力を測定するということをしていた。実際に昨年冬にも受験をしている。GREに関しては少なくとも四年前よりも良い成績を得たいと思う。数学のセクションに関してはもう上がらないほどの得点を六年前から獲得して

---

おり、ライティングに関してはこれまでの最高成績の4.5を上回る5.0を取れば上出来だろう。米国人の英文学科の学士号を取得している者ですら4.0を取れないことがあるのだから。

鬼門は英語の語彙と文章読解セクションである。基本的にGREは英語を母国語とする人間が大学院に行く際に受験するものであり、ネイティブではない人間にとってこの英語のセクションが非常に難しい。ジョン・エフ・ケネディに通っていた六年前に、ある大学の博士課程に進むためにGREを受験しようと思って勉強を進めていた際、ジョン・エフ・ケネディの大学院生に通う友人の何人かに、GREで出題される語彙について少しばかり尋ねて回ったことがあり、往々にして彼らですら知らない単語がたくさんあるようだった。

幸いにも、難解な名詞、つまり専門用語を覚える必要はほとんどなく、ただし形容詞や副詞の難解なものをとにかく数多く覚えなければならない。受験に向けた勉強は非常に大変だったが、そこで覚えた語彙が後々どれほど役に立ったかは言うまでもない。

今フローニンゲン大学で論文を執筆する際にもそこで学んだ語彙が活きている。どうも私は単語を覚えることが昔から好きなようであり、GREに出題される語彙を網羅した優れたテキスト“Franklin GRE Word List: 3861 GRE words for High GRE Verbal Score (2014)”をこの二年間ずっとトイレで読み続けていた。そのおかげもあり、一昨日から対策問題集に取り掛かってみると、四年前に比べて随分と問題に対する難解さが払拭されていた。明日からはまた少しずつGREに向けた勉強を進めていきたい。数学のセクションについてはごく簡単に対策をするだけで十分であり、英語のセクションについては論理パズルを楽しむように勉強を進めていく。フローニンゲン:2018/7/12(木)20:46

### 2830. 二つの特徴的な夢

今朝は六時に起床し、六時半過ぎに一日の活動を開始させた。目覚めと共に身体運動をすぐに行い、ゆっくりと身体を目覚めさせていった。精神がより目覚めてくるのはもう少し後になってからだろう。それまではゆっくりと早朝の習慣を行っていく。

今日はどうやら部分的に雲がある日となるらしい。最高気温は21度であり、最低気温は11度であるから肌寒い。昨日よりも穏やかな微風が吹いている。雲のゆったりとした流れを眺めていると、「ゆっくりと歩んでいけ」と自分に告げているように見えてくる。

---



---

今、朝方の夢についてぼんやりと思い出している。夢の中で私は、砂利でできたサッカーグラウンドの脇にいた。私は白線の外にいて、グラウンド内で試合をしている友人たちの様子を眺めていた。時折白線を越えてこちらにボールが転がってくる時はそれを拾い、試合の進行に協力をしていた。

仲間のチームがスローインをする際には、ボールを渡す時に少しばかりこちらから助言を与えることもあった。コート脇で試合を観察している分、私にしか気づかないことがあり、それを仲間たちに伝えることを行っていた。大げさに言えばさながら監督のような役回りを少々行っていた。試合は拮抗しており、両者ともにゴールを挙げることは非常に難しいようだった。

ボールが自分のところに転がってくるたびに私はそれを優しく蹴って返していたが、それをするごとに試合に出たいという感情が高まっていた。ある時、仲間がスローインをするタイミングを見計らって交代の願い出をした。すると一人の友人が疲れた表情を見せながら私と交代してくれることになった。私は意気揚々とグラウンドに入っていく、交代してから数秒後にゴールを決めて試合の均衡を打ち破った。

そこから突然、先ほどまでサッカーボールだったものが豆粒に変わり、試合は豆粒を蹴ってゴールに入れることに趣旨が変更された。しかもその豆粒は一つではなく、二つほどあった。豆粒を蹴ることに誰もが最初は戸惑っていたが、私はすぐにそのコツのようなものを掴み、プレーで示しながら仲間にもそのコツを伝えていた。そこからはこちらのチームが一気に数点を重ねることになった。最後には、あえて私は相手チームのメンバーとなり、相手にもそのコツを伝えていた。そこで夢の場面が変わった。

見知らぬ街。時間の流れが幾分せわしない大きな街に私はいた。

空は晴れており、一見すると明るい雰囲気を出している。時間帯は正午過ぎだろうか。街をゆっくりと歩いていると、後ろから誰かがつけてくるのに気づいた。最初はなんとも思わなかったが、徐々にそれが気持ち悪く感じられ、歩く速度を速めた。それでも誰かが私の後をつけてくる。

たまたまに私は走り出した。すると後から追ってくる人物も走り始めた。私はその時まで一切後ろを振り返ることをしなかったのだが、走り始めてしばらくして後ろを振り返った。するとそこには、拳銃を

---

持った男がいた。私を襲おうとしていることは明白だったので、私は突然その場に止まり、拳銃を持ったその男と戦うことにした。

夢の中の私はプロボクサーであり、普段は決して一般人にボクシングの技術を使うことはないのだが、自己防衛のためにやむなくその技術を使うことにした。拳銃を持つ男の腕の付け根を一瞬にして殴り、拳銃を地面に落とさせた。続けざまに腹と顔を殴ると、その男は悶絶し、体を前かがみにして倒れ込み始めた。ボクシングの試合であればそこでKOなのだが、私はうずくまりつつあるその男の背中を、ボクシングでは禁止されている肘で叩きつけた。するともう完全にその男は地面に顔をつけるぐらいに倒れかかっていたのだが、念のために足で蹴り上げる形で体を起こし、もう一度同じサイクルで腹と顔を殴り、肘で背中を打ち落とすことによってその男を完全に地面に叩きつけた。

その男がほぼ瀕死の状態になったことを確認した上で、私は振り返ることをせずにその場からゆっくりと立ち去った。地面にうずくまる男から徐々に離れていくと、その男がもう一つ拳銃を隠し持っているような予感が若干あったが、それを気にすることもなく、私は前を向いたまま歩き続けた。そこで夢から覚めた。

どちらの夢にしても、自分のシャドーが色濃く出ているように思う。サッカーをする夢は頻繁に見るものであり、相手を殺傷するほどの力で人を殴りつける夢も比較的多く見る。後者については相手の特性がほぼほぼ明らかになっていて、夢の中の私を攻撃しようとする者である。身体的にも精神的にも自分に危害を加えようとする人物に対して私はとても暴力的になる。そのようなことがわかっている。今朝方見たそれら二つの夢についてはまたゆっくりと考えを深めていくことにしたい。

フローニンゲン:2018/7/13(金)07:19

#### 2831. 四つの活動とABNアムロ銀行について

今朝は昨日以上にとても涼しい。書斎の窓から通りを眺めると、七時を過ぎてまだそれほど経っていないにもかかわらず、多くの人たちが通勤や通学に向かっている姿を見た。一台の赤いバスが通りを過ぎ去っていった。今日もこれから一日が始まろうとしている。

---

昨夜も就寝前に、再度自分の中で確かめるように、日記、読書、デッサン、作曲、それら四つだけに従事していく生活を実現させていこうと思った。生活のための労働は一切しないこと。それを自らに誓う。生活費については投資の収益がそれを賄ってくれる。

昨日、所用があってオランダ大手のABNアムロ銀行に足を運んだ時、待合室にABNアムロ銀行のAnnualレポートが置いてあり、私はおもむろにそれを手に取った。フローニンゲンのABNアムロ銀行は昨年に内装が刷新され、以前よりも格段に綺麗になり、よりいっそう現代風になった。以前の内装も決して悪いものではなかったのだが、今年の改装によってより高級感のある雰囲気となった。企業文化の違いもあり、こちらの銀行の雰囲気は節度がありながらもフランクだ。

銀行の中に入ると、そこには巨大なタブレットのようなものが壁に掛けられており、その前に銀行員の女性が一人立っていた。その女性に用件を伝え、座り心地の良さそうなソファの方に案内され、そこに腰掛けた。

日本の銀行ではあまり見かけないが、こちらの銀行ではコーヒーやお茶などが自由に飲める。二年前に銀行口座を開いた際には、新規の口座開設程度の用件なのに、担当職員がコーヒーを出してくれたのを思い出す。

ソファに腰掛けてふと右横の小物を置くためのテーブルに目をやると、Annualレポートを見つけた、というのがAnnualレポートを手に取るまでの一連の出来事である。

私は大学時代に会計と金融を専攻していたこともあり、当時はAnnualレポートや有価証券報告書を読むことが本当に好きであった。大学を卒業した後に就職したコンサルティング会社でも経済分析の際には毎回Annualレポートや有価証券報告書を読むことができ、その当時からそれらを読むことに楽しさを見出していた。

昨日もいつもと同じように、貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書などを眺めて、一昨年と今年のABNアムロ銀行の経営状況を把握しようとしていた。その後、以前から気になっていた、ABNアムロ銀行が提供するプライベートバンキングサービスについて調べてみることにした。

---

ここ最近、日本の大手銀行を含めて、各国の銀行が提供するプライベートバンキングサービスについて調べることがあった。また、プライベートバンキングではなく、プライベートバンクそのものについてもあれこれと調べ、スイスのものを中心にそれらの銀行を精査するようなことをしていた。

アニュアルレポートを読んでいると、どうやらABNアムロ銀行はプライベートバンキングサービスにより力を入れていくようであり、以前の最低預け入れ金額100万EURO(1.3億円)から50万EURO(6500万円)に引き下げようだ。確かにこれにより、プライベートバンキングサービスを活用する人の門戸は広がるように思うが、銀行としてどれだけの収益を上げられるのだろうか少しばかり考えていた。また、仮に最低預け入れ金額を幾分積極的に運用してもらうことにし、年利10%で運用することができたら投資収入は毎年650万円ほどになる。

ABNアムロ銀行の運用力についてはまだ定かではないので、仮に5%で最低預け入れ金額を運用してもらった場合には、年に325万円ほどの投資収入になるが(本来は手数料も考える必要がある)、これだけでは一年間の生活ができないこともないが、あまり十分なものとも言えない。やはりプライベートバンキングサービスを活用する側にとっても、最低預け入れ金額は100万EUROほどあった方がいいのではないかと思う。そのようなことを考えていると、今回担当してくれるトーマスという銀行員がやってきた。

ソファから立ち上がり、トーマスと握手をして、個室に通された。改装後、ABNアムロ銀行の全ての顧客対応が個室で行われるようになり、窓口のようなものは一切なくなった。あるのは開放的なロビーとそれらの個室だけである。トーマスと雑談をしながら、要件を伝え、すぐに必要用書類を作ってもらった。所用はすぐに終わり、帰り際に再度ABNアムロ銀行が今後どのような経営を行っていくとしているのかを改めて調べてみようと思った。後ほど調べてみると、ブロックチェーンの技術そして仮想通貨そのものに関心を示していることがわかった。このあたりについてはさらに調査を進めていきたいと思う。

ふとこれまで書き連ねてきた文章を眺めてみた時に、なぜABNアムロ銀行についてあれこれと書き綴っていたのが不思議に思ったが、結局は、冒頭の四つの活動だけに従事するためには投資収入が不可欠となり、投資商品の調査の一環でABNアムロ銀行のプライベートバンキングサービスに関心を持っていた、ということだったようだ。フローニンゲン:2018/7/13(金)08:01

時刻は午前八時を迎えた。一羽の小鳥が今、高らかな鳴き声を上げた。

先ほど、考え事をしながらコーヒーを作ろうとしていたら、水の分量を大幅に間違えた。起床直後に作っているお茶の分量と同じほどの1リットルの水をコーヒーメーカーに注いでいる自分がいることに気づいた。

実は私は冬の時代には毎日1リットルほどのお茶とコーヒーを飲んでいて、今から考えるとそれは過剰であり、フランスの文豪バルザック並みに毎日コーヒーを飲んでいて、それがわかる。

1リットルと書くと量が多いように思うが、大体コーヒーカップ5杯ほどの分量である。現在はコーヒーを毎日午前と午後一杯ずつしか飲んでいない。寒さの厳しい冬になったらまた分量が増えるかもしれないが、当面はコーヒーを飲みすぎないようにこれくらいの量に留めておきたい。コーヒーの分量を間違えてしまったので、今からもう一度コーヒーを作り直す。

最近ではコーヒーを作るときに工夫として、滴るお湯の速度を遅くするようにしている。より濃いコーヒーを抽出するためにはコーヒーメーカーから出てくるお湯の速度が緩やか方がいいのではないかと考え、今ではお湯の出口の下にフォークを横に置き、フォークを滴る形でお湯が降りていく工夫をした。

以前は木製の箸を使って同じことをしていたのだが、見ると、箸の先端が熱によって変形してきていることに気づき、箸を使うことはやめた。スプーンでは陥没した部分にお湯が溜まってしまい、確かにスプーンを逆さにして対処するというアイデアもあったが、フォークの方がお湯の落ち方が良い。

日本に住んでいた時は自分が選んだコーヒーメーカーを使っていたが、今は家に備え付けのものを使っている。今後はまた自分で選んだコーヒーメーカーを使いたいと思う。

先ほど、創造活動だけに従事する生活とそうした生活を可能にするための投資の重要性について少しばかり文章を書き留めていたように思う。欧州での二年目の生活が終わりに差し掛かるに連れて、自分が情熱を傾けられることだけに従事する生き方をしたいと思った。

---

書齋の窓辺によってきた小鳥を眺めていた時に、その小鳥は嫌々そこで休んでいるわけではないことに気づいた。また、嫌々空を飛んでいるわけでもないことを知った。嫌々物事に取り組む傾向があるというのはもしかしたら人間だけなのではないかと思う。

「やる気がないならやめちまえ」「嫌ならやらなくていいわよ」というのは幼少時代に両親から言われてきたセリフである。これは甘えを助長するものではなく、むしろこうしたセリフを述べる時の両親は厳しい態度であったから、それは躰の一環であったように思う。今振り返ってみると、それらのセリフに内包されている教育的意義と、人間が真に生きることの真理が見えてくる。

昨日も就寝前に、やる気がないならやめた方がいいし、嫌ならやらない方がいいということを思った。人はある対象に真に情熱を傾けているのであれば、それをすぐにやめることなどできないはずである。仮にやめたいと思えばすぐにやめればいい。なぜなら、最初からその対象は自分の情熱の範囲外にあるのだから。

私はこれまで様々なことに挑戦し、同時にその分だけ様々なことをやめてきた。やる気がないなら本当にやめるべきだ。嫌だと思えばそれを早急にやめるべきだ。やめずに残ったものが自分の本当の使命なのだと思う。色々なことに挑戦し、色々なことに挑戦する中で結局私に残ったものは一体何だったのだろうか。それを昨夜考えていた。

すると幾分笑いが込み上げてきた。結局自分に残ったのは、日記、作曲、デッサン、そして読書だった。これら四つであれば、人生を終える最後の日の最後の瞬間まで従事することができるし、そうしたいと思わせるものだということに気づかされた。慣習的な目でそれら四つを眺めれば、それらの活動は取るに足りないことかもしれない。さらにそれらを飽くなき金銭獲得を希求する現代社会の病的な目を通して眺めてみれば、これら四つの活動は金銭獲得に結び付きにくいという特徴を持つがゆえに、本当に取るに足りないものだと見なされてしまうだろう。

本当に取るに足りないと見なされてしまうものが自分にとって本当に大切なものだという事に気づかされた。やめたくないと思うものに出会えるまでやめ続けていくこと、活動に従事するその行為そのものに没頭できる対象に出会えるまで様々なことを嫌いになって手放していくこと。やめ続け、手

---

放し続けた末に残ったものを人生の最後の最後の瞬間まで続けていけばいいのではないだろうか。  
人間以外の生き物はそうして生きている。フローニンゲン:2018/7/13(金)08:44

### 2833. あるゲームの終わりに向けて

今日は一日の活動を開始してから二時間半以上にわたって日記を書き続けている。今もまた何かを書き留めておこうとしている。二時間半ほど日記を書き続けていると、それによって一日の活動に向けて精神が完全に目覚めつつあることに気づく。日記を執筆するというのは一日の活動を開始する上で本当に欠かせないものである。

確かに今日は早朝に日記を書き留めておく分量はいつもより多いが、正直なところ全くもってまだ書き足りないように感じている。内側から外側に出てくるものにひたすら言葉を与え続けていくこと。自己組織化の流れを遮断せず、むしろそれを促進するために言葉を与え続けていくことが重要であるという認識は以前から持っているものであり、特に今朝はその考えを大切にしている。

バッハの前奏曲13番の始まりの音とコーヒーの抽出が完了した音が同時に鳴り、ハッとした。すると、先ほどまで書こうとしていたことがどこかに消え去り、新たな主題が立ち現れた。

先ほど、四つの活動だけに従事していく生活をこれから送っていくことについて書き留めていたように思う。いかんせんそれら四つの活動は収入を生むものではなく、また私はそれらから収入を得ることを一切望んでいないため、別的手段で収入を得ていく必要がある。そこで重要になってくるのが投資であった。これまでの人生を振り返ってみると、自己教育については確かに積極的に投資を行っていたように思う。その時の私は決してそれを投資だとは思っていなかったのだが、今振り返ってみると、結果としてそれは教育への投資だったと捉えることができるだろう。

社会人になってから三つほどの修士号を欧米の大学院で取得したことは、振り返ってみると大きな投資だったように思う。おそらく現代社会の多くの人にとって、「投資」という日本語が醸し出すイメージと感覚はあまり肯定的なものではないかもしれないが、振り返ってみると、欧米の大学院で学びを得たことは本当に大きな意義を持つものであったと思う。

---

投資がもたらす人生の意義。投資には意義をもたらす力があるらしい。もちろん全ての投資がそうだとは言えない。だが、本質的な投資、もしくは投資の本質は意義を私たちにもたらすものなのではないか、もしくはそれをもたらすべきものなのではないかと思う。

ここ最近、日記、作曲、デッサン、読書だけではなく、昼食後の一時間ほどを投資の学習に時間を充てている。ここでいう投資というのは、教育への投資ではなく、一般的な意味での金融投資である。思い返してみると、大学の学部生の頃に金融投資については熱心に勉強をしていた。株式・債券から始まり、不動産投資についても勉強をしていたことを懐かしく思う。

当時は学生であったから、そうした投資を行う元本はほとんどなく、また実際に投資をしてみるというよりも、それを学術的に学ぶことの方が楽しかった。当時に財務会計・管理会計、そして金融工学をはじめとした金融理論の基礎をしっかりと学んでいたことが、今思わぬ形で自分の人生を支え始めてくれている。そうした様子を見るにつけ、学部時代の教育に感謝をする必要があるだろう。

今は再び熱心に投資の勉強をしているが、それには一つの狙いがある。自分で投資をし続けるという馬鹿げたことを早々に切り上げるために、今投資の学習を熱心に進めているのだ。言い換えると、この現代社会におけるある一つの馬鹿げたゲームから脱却するために、一度そのゲームと真剣に付き合い、そこから脱却しようと企てているのである。ひとたびそのゲームから抜け出せば、その後は上述した日記、作曲、デッサン、読書だけを行う生活に入る。

窓際にやってきた小鳥や通りの街路樹と異なり、人間として生きていく上でこうした計画を立てなければならぬのは面倒だが、それは人間としてこの現代社会で生きていく上で仕方のないことだと受け入れる必要があるだろう。本当は小鳥が歌うように、街路樹が風に揺られるように、日記、作曲、デッサン、読書だけをしていきたいのだが。フローニンゲン:2018/7/13(金)09:07

#### No.1130: Autumnal Tints

It is 10:30AM on Saturday. Today is sunny, and leaves of street trees are trembling gently by the wind. I couldn't help saying to myself, "Oh, leaves started to turn red." Groningen, 10:35, Saturday, 8/18/2018



世間にいかに認められないか、世間からある種疎外された形で生きていくかがいかに大切かについて先ほど考えていた。世間から認められた瞬間に自分の中の大切なものがこぼれ落ちてしまうような予感がする。それは肉体的な死ではないが、精神や霊性の死につながる類のものである。そうした意味において、世間は人を殺すのだ。

とにかく世間からいかに認められないかについて考えていかなければならない。そのための方策を練っていくことはこれからも続けていく。世間の外で、誰からも見られていないところで絶えず自分の活動に従事していくこと。これが何より大切だ。世間と関わっていて良いことなど一つもない。

仮に現代社会の「あの」ゲームに興じるのであれば世間と付き合いしていく必要があるかもしれない。だが、そのゲームの外で生きていこうと思うのであれば、世間と付き合い合うことはやめたほうがいい。フローニンゲンの曇った空はそのようなことを語りかけてくる。

早朝に起床した際に、確かに空には雲があったのだが、すぐに晴れ間が広がるだろうと期待していた。ところが今も相変わらず空一面が薄い雲に覆われている。ただし、それでも太陽の神秘を感じることができるため何の問題もない、というようなことを先ほど思っていた。それを思わせてくれたのは、以前にサティの曲を参考にして作った曲だった。

今日はこれから、久しぶりにサティに範を求めて曲を作ろうと思う。作曲ノートを確認すると、ほぼ一ヶ月前にサティに範を求めて作曲していたことがわかった。午前中に一曲ほど作り、昼食前に過去の日記を少しばかり編集する。その後、近所のスーパーに足を運び、昼食に合わせて、明日作る一週間分のカレーの材料を購入する。これまでは、「豚を食べれば豚のようになり、牛を食べれば牛のようになる」という個人的な食事原則から、カレーには肉類を入れていなかった。

私はベジタリアンではないのだが、自らの手で殺せないものは食べないという倫理的な考えが脳裏をよぎることがあり、カレーに関しては肉類を入れないことにしていた。しかし、先日動物性たんぱく質をもう少し摂取した方がいいのではないかという考えが芽生え、それ以降、オーガニックの豚肉を

---

カレーに入れるようにしている。先週はこれまでの習慣からか、豚肉を購入することを忘れてしまったが、今日は忘れずに購入したいと思う。

昼食後に投資の勉強をして、その後に仮眠を取ったら再度作曲実践をする。その後、論文の誤字脱字の確認、そして文章の圧縮作業に取り掛かる。三度目の修士論文を書き終えることが近づいてくるにつれて、科学的言語と詩的言語の相違、とりわけそれらが開示する世界の範囲と性質について考えることが多くなった。私にとっては、前者の線形的な言語特性に少々辟易している。

ただし、それは自分が文章を書く場合においてである。他者が線形的な科学言語を用いて執筆した優れた論文を読むことは今もなお充実感を私にもたらしてくれる。自分がそうした言語を駆使して文章を書くことに飽き飽きしているということを感じ始めているだけだ。一方、後者の詩的言語については、他者がそれを用いて産み出した詩作を理解するのは大抵難しい。先日マラルメの詩集を読んだ時にもそれを感じた。だが今は、そうした詩的言語に徐々に親しみつつある自分の姿を見て取ることができる。これまでは詩集を購入することはなかったのだが、ここ最近立て続けに、ルーミー、ブレイク、マラルメ、リルケ、オーロビンドの詩集を購入したことがそれを物語っている。

日々の読書に関して、学術論文や専門書だけではなく、詩集が読書の範疇に入ってきたことは、これからの自分の変容を静かに予感させる。日曜日に最終版の論文を提出すれば、来週からは再び詩集をゆっくりと読むことができるだろう。それを楽しみに今日の論文の修正作業に取り掛かる。

フローニンゲン:2018/7/13(金) 10:19

#### No.1131: Quiet Morning

This morning is quiet as usual and even meditative. I want to make progress for my daily work, engaging with it in a mindful way. Groningen, 10:56, Saturday, 8/18/2018

### 2835. 投資と霊性

昼食前に過去の日記の編集を少しばかり行い、その後、近所のスーパーに買い物に出かけた。今日は曇りということもあってか肌寒く、大抵の人達は長袖を着て外出している。

---

先ほど昼食を摂り終え、これから午後の活動に入っていく。近所のスーパーを含め、現在外出する際には目の前の通りの工事の影響で迂回して出かけていかなければならない。

気長に工事の進捗を眺めていると、今日は作業員の姿も見えず、作業は停止している。今日は平日であるにもかかわらず、作業がなされていないのを見ると、実にゆったりとこの工事を進めているののだなと伝わる。オランダは先進国なのだが、こうしたところにもゆとりを感じる。昨日も作業をしていたのは午前中の数時間だけだったのではないかと思われる。もしかしたら街の他の場所で工事を行っている可能性もあるが、実にのんびりとしたものである。

昼食を摂っている最中に、今朝方に日記に書き留めていたことについて再度考えていた。現代人はどうも消費に邁進するように仕向けられているが、投資をするような心の有り様が養われておらず、また投資に関する知識も技術もないような状況に置かれているように思える。

確かに国家の考え方として、「貯蓄から投資へ」ということが随分と前から提唱されているが、果たしてこれがどれほど実現されているのかは非常に疑わしい。そもそも消費することだけに飼いならされてきた国民の心の有り様は根本的に何ら変わりなく、なおかつ投資に関するリテラシーもないのであるから、国民にそのような言葉だけを投げかけるのは非常に不親切のように思えるのは私だけではないだろう。

仮に幾人かの人達が貯蓄から投資に乗り出したとしても、心の有り様が変わっておらず、投資のリテラシーもない状態であれば、投資によって不幸を招くことにも繋がりがかねない。仮にその提唱が功を奏したとしても、今度は投資にだけ飼いならされるような人間が生まれてくることも考えられる。

諸々の発達現象はたちごとこのような側面を持つが、少なくとも貯蓄をすることだけに盲目的な状態と、次に待つ投資をすることだけに盲目的な状態の先にまで進んでいくような自らの精神の有り様とリテラシーが求められるように思う。この問題は霊性に関しても構造的には同様であり、「自らの霊性に目覚めましょう」という言説も、これまで自らの霊性を閉じた形で生きることに飼いならされてきた人間にとっては自らの霊性に目覚めることなどすぐにできるものではない。

一方で、その言説を真面目に鵜呑みにし、霊性の開発だけに勤しむような極端な人も生まれてくるだろう。こうした傾向は私たちの目には見えないところで実際に起こっている。私はとりわけ米国の

---

バイエリアのコミュニティーでそうした状況を見てきた。ここでも結局は、霊性に関する無知が問題を生む一つの大きな原因になっており、霊性に対する知識、そして霊性を育てていく技術を自ら獲得していく姿勢が大切になってくる。

そのようなことを考えていると、金銭にせよ、霊性にせよ、現代社会の多くの人間にとっては諸々の事柄が消費の対象に成り下がってしまっているのではないかと思えてくる。一生懸命に金銭を消費し、時間を消費し、挙げ句の果てには霊性を消費しようとする。かなり本末転倒な様子が伺える。

結局のところ、投資の根幹には創造があり、霊性の開発にも創造が関与しているのだと思う。そうなると、現代人は創造の仕方がわからないのだと言えそうだ。

消費に関してはわかっているというよりも、それは本能的な次元で無意識的に行うように仕向けられてしまっている。一方で、創造に関しては何一つその方法がわかっていないのが現代人なのではないだろうか。ここにはやはり、自ら何かを創造することを支援してくれる教育を受けてこなかったことが大きな原因として存在しているように思う。創造を支援する教育が存在していないことが、人々を他者が生み出したものを単に消費することだけに向かわせていくのだ。ここでふと、芸術教育・霊性教育・投資教育の新たなつながりがまた見えてきた。フローニンゲン:2018/7/13(金)13:25

#### No.1132: Longing

Although it is still cloudy, a light blue sky starts to appear. I long to see the serene sea.

Groningen, 11:06, Sunday, 8/19/2018

### 2836. 小さな創造物の堆積

時刻は夕方の四時を迎えた。先ほど雲間から太陽の光が差し込む瞬間があったが、今はまた空が雲に覆われてしまっている。小鳥の鳴き声と通りを走る車の音が聞こえて来る。

今日は午前中に、サティに範を求めて一曲作り、先ほどはモーツァルトに範を求めて一曲作った。サティの曲を参考にしている最中にいつも思うのは、彼の音楽世界が持つ独特の神秘性・幻想性である。不思議な心地を引き起こす妙な曲がいくつもある。一体どのような方法でそのような質感を

---

持つ曲を生み出しているのか大いに気になり、いつも好奇心を持ってサティの曲の楽譜を眺めている。

午前中に作った曲に関しては、「あるがままに生まれた曲」と述べてもいいかもしれない。実際には、いつもそのような形で曲が生まれていると言えなくもない。未だ音楽理論や作曲理論に対して明るくないため、緻密に考えようと思っても考えるための具材がなく、結果として多くは直感的に音を置いていくという手段に頼らざるをえない。これが功を奏する時もあればそうでない時もある。このような形で生まれてくる曲を「あるがままに生まれた曲」と仮に命名しておく。

サティの音楽世界が持つより深い神秘性について理解を深めたいと思う。サティの手紙が収められた書籍を以前に購入し、すでに一読したが、そうした書籍をいくら読んでいてもサティの深い音楽世界を理解するには限界がある。やはり望ましいのはサティが残した実際の音楽に触れることであり、楽譜を眺めていくことだろう。楽譜は作曲家が残した手紙のようだと最近強く思う。

手紙として受け取った楽譜とどこまで深く向き合うことができるかが重要だ。そうした態度に手紙を理解する度合いの差が生まれる。これは先ほどモーツァルトの曲に範を求めた時にも思ったことである。

すでにこの世を去った作曲家と楽譜を通じて対話ができる喜び。それを常に忘れないようにする。夜にバッハの曲を参考にする際にもその点を忘れてはいけない。

今日はこれから論文の最後の修正に入る。今日をもって論文の修正は終わりにしたい。論文の執筆や作曲を通じて思うのは、最初から長いものを書こうとしないことの大切さである。人はいきなり長いものを書こうとして結局は途中で挫折する。短いものを積み重ねていけばいいのである。それを継続させていくと、ある時ふと長いものが生まれることがあるかもしれない。長いものはそのようにして生み出されればいいのである。あるいは、短いものの集積を長いものにしていけばいいのである。要点は、出てくるものを出てくるだけ外側に形として出すということであり、往々にして一回に出てくる量は小さいものだという認識を持っておけば、最初から大きなものを生み出そうという発想に囚われずに済むだろう。

---

日記にしても作曲にしても、とにかく小さなものを膨大に生み出していくこと。時に長いものが偶然に生まれることがあるかもしれないが、それは例外と認識する。結果として、膨大に生み出された小さな創造物が巨大な一つの創造物に姿を変える。そのようなイメージを見ている。フローニンゲン：  
2018/7/13(金)16:17

### No.1133: A Festival During a Day

I notice that there is a moment of the midst and end of a festival during a day. The source of the festival seems to be in the transcendental world. Groningen, 11:14, Sunday, 8/19/2018

### 2837. 論文の最終修正の完了

穏やかな土曜日の朝を迎えた。今朝は六時過ぎに起床し、六時半から一日の活動を開始させた。

空を眺めてみると、昨日の早朝と同様に、薄い雲が空全体を覆っている。時折雲に隙間があり、そこから青空が見える。今日も午後あたりからこの雲が晴れてくるかもしれない。

昨夜を持って無事に論文の最終レビューが終わった。無事に規定の分量に論文を収めることができ、なおかつ誤字脱字の確認を終わらせることができた。字数制限に関しては本当に規定ギリギリまで執筆しており、残り50字ほどであった。随分と不要な文章があったのでそれらを削除していきながら、文章の密度が弱いところに関してはその強度を補強していった。そのような作業を昨日は夕方から就寝に向けて行っていた。無事にそれらの作業が終わったところで、最後に論文アドバイザーのミヒャエル・ツシオル教授に最終版のワードを送った。

本来はツシオル教授の仕事ではないはずなのだが、ツシオル教授も最後に誤字脱字などのレビューを行いたいということなので最終版を送ることになった。昨夜を持ってして論文の執筆に関してはもう完成したと言っていいだろう。あとはツシオル教授から誤字脱字のレビュー結果をもらい、もう一度自分の目でそれらの箇所及び全体をレビューしたら完成となる。完成した論文は明日の夜にでも二人の論文審査官に送ろうと思う。それをもってして論文の執筆については完全に筆を置くことになる。今回の論文執筆は昨年と比べて最後の最後でその作業が長く感じられた。

---

昨年は二人の審査官に論文を一度提出した段階で終わりを迎えたが、今回は二人の審査官のレビューが入り、そのレビュー結果を反映させる形で再提出することになった。もちろん、このレビュー結果を受けて論文に加筆修正を施したことによって随分と論文の質が上がったように思うため、これは好意的に捉えている。一方で、論文の執筆から解放されたと一度思っていた自分にとっては再度論文と向き合うことに戸惑いを一瞬覚えたことも確かである。だが、もうそのようなことを心配することもない。

論文を完成させたことを受けて、今日からは自分が真に望む探究活動と創造活動だけに従事していこうと思う。早朝にまずはテレマンに範を求めて作曲を行い、その後に過去の日記を編集していく。日記の編集に合わせて、数日前に届いた“J. Krishnamurti: Education and the Significance of Life (1953)”の初読を開始したい。本書は130ページほどの分量であるため、今日中に初読が終わるだろう。

クリシュナムルティの教育思想を理解する上で本書は格好の手引書になる。読書に関しては、今日の午後や夕方にはルーミーの詩集を読み進めていきたいと思う。また、午後と夕方の二回に分けてモーツァルトとバッハの曲に範を求めて作曲実践をしたい。そのような形で今日を過ごしていく。フ  
ローニンゲン:2018/7/14(土)06:58

#### No.1134: Devotion

Today is cloudy again as well as yesterday. Whatever a day looks like, I'll devote myself to my lifework. Groningen, 09:40, Monday, 8/20/2018

#### 2838. ウィリアム・ブレイクの作品に関する印象的な夢

今日は室内にいても肌寒い。天気予報を確認すると、最高気温が21度であり、最低気温は10度である。空一面が雲で覆われており、太陽の光が降り注いで来ないことも肌寒さを助長しているように思う。昨夜は論文の最終修正を行うために、随分と念入りに自分の文章を読み返していた。昨年の論文に比べても、自分の文章に進歩が見られたことは喜ばしいことであった。自分が扱う日本語も英語も進歩を遂げていく。自分の内面が成熟に向けて歩みを続けている限りはその現象が生じる。

---

今年執筆した論文と昨年の論文を比べてみた時に、論文内で構築される文章の密度を観察してみると、それがより緻密なものに姿を変えていた。緻密さの向上は、文章の質的な深化を表している。文章はやはり書けば書くだけその密度が高まっていくように思える。もちろんただ文章を書けばいいというのではなく、書いた文章そのものからフィードバックを受け、そのフィードバックを新たな文章に反映していくという意識と実践が求められる。そうした意識を持ち、実践を継続させていけば、自分の文体がより洗練されていく。

今突然、今朝方の夢について思い出した。とても重要な場面を思い出したのでそれを足早に書き留めておく。夢の中で私は、東京のある美術館にいた。厳密には、多摩にある美術館の外にるところから夢が始まった。

その美術館の後ろには山があり、自然が近くにある。街から坂道を登る過程でその山が美術館の背中に見える。私は、母と娘の関係だと思われる二人の女性が坂道を登り切り、美術館の中に入ろうとする姿を眺めていた。その姿を見届けた後、私も美術館の中に入った。

そこはとても清潔感のある美術館であり、館内の開放的な窓からは外の自然を眺めることができる。天井にも工夫が凝らされており、太陽の光がうまく差し込むようになっている。そのため、館内は自然の光によってとても明るかった。

館内をゆっくりと歩いていると、私はある一枚の絵の前で足を止めた。ちょうど私の横には、この美術館のオーナーらしき人がいた。

**私:**「この絵は随分と迫力がありますね」

**オーナー:**「ええ、私もそう思います。この絵の作者が誰かわかりますか？」

**私:**「江戸時代の日本人画家の誰かですか？この絵に大きく描かれている女性の服装や容姿を見ると、江戸時代の人間がモチーフになっていますよね」

**オーナー:**「そう思いますよね。ですが、違うんです。イギリスの画家、ウィリアム・ブレイクです」



---

私:「えっ、ブレイク？あのブレイクですか？ブレイクがこのような絵を描くとは想像できませんでした」

オーナー:「この絵を発見した時、私も最初はそう思ったんですよ。何せブレイクは幾分宗教的な絵画や若干グロテスクな絵画を描きますでしょう」

私:「ええ、その通りですね。だから私もこの絵がブレイクによって描かれたものだと聞いて驚きました」

オーナー:「実は、もっと驚くことがあるんです」

私:「えっ、それは何ですか？」

オーナー:「この絵に描かれている人物の瞳を見てください。左目の中をよく見てみると、何が見えますか？あつ、ちょっと見づらいかもしれませんね。ハイテクの機器があるので、それを用いて拡大してみましょう。さて、これでどうでしょう。何が見えますか？」

私:「こ、これは驚いた！どこかの国の象形文字ですね。よくよく見ると、古代中国語か何かですか？」

オーナー:「ええ、まさにその通りです。私たちはこの瞳の中に描かれた象形文字の意味を解読してみたんです」

私:「どんな意味だったのですか？」

オーナー:「どうやらこれは当時の日本人が用いていた言語らしく、当時の日本の様子が表現されていました。ある貿易商の男が街の食堂に入り、そこで仲間と談笑を楽しんでいる光景が描かれていました」

私:「それは面白いですね。より具体的にはどのようなことが表現されていたんですか？」

オーナー:「はい、食堂に入った貿易商の男は食堂の中を一瞥し、その後・・・(説明続く)」

---

オーナーの説明を聞いていると、それは一種の物語であるかのようにだった。なぜだかわからないが、オーナーが一つ一つの光景を説明するたびに、その場の光景が鮮明なイメージを伴ってありありと想起された。

よくよく考えてみると、ブレイクが生きていた時代は確かに日本の江戸時代と重なる。江戸時代の日本の街の様子、特にある食堂の中で展開されていた人間模様が鮮明なイメージとして捉えることができた時、私はとても嬉しく思い、それは感動的でした。

オーナーの話をして聞き終えた後、私はオーナーにお礼を述べ、もう一度その巨大な絵を眺めた。絵に描かれている人物の瞳を再度眺めた時、その瞳に吸い込まれそうになった。江戸時代のあの光景の中に再び引き込まれそうになる自分がその場にいたのである。そのような夢を今朝方見ている。

改めて思い返してみると、随分と印象的な夢であった。あの絵画作品に描かれていた女性が着ていた服の青銅色の鮮やかさを忘れることができない。また、その女性の瞳の奥に密かに描かれていた無数の文字についても忘れることができない。あの夢は一体何を示唆していたのだろうか。フロンゲン:2018/7/14(土)07:27

#### No.1135:A Masquerade on the Other Side of the Door

A door shows up suddenly in front of my eyes, and I can find an ongoing masquerade on the other side of the door, which I've never seen before. After I go out of the exit of the masquerade for a while, I can encounter a new door, on the other side of which another dance party is being held. Our life seems to be a continuity of open and close doors, and a masquerade. Groningen, 09:50, Monday, 8/20/2018

#### 2839. バッタと「それ」

早朝にふと、バッタは飛び跳ねるだけではなく、歌うこともできることに気づいた。これは過去に作った曲を聴いている時にもたらされた気づきである。心の眼でゆっくりと観察すれば、バッタは飛び跳

---

ねるだけではなく、歌うことができることをわかるに違いない。それがわからなければ、心の眼を喪失した現代人の典型だということを示している。そのようなことをふと考えていた。

開けた書斎の窓から子供たちの遊ぶ声が聞こえて来る。そうだ、今日は土曜日であった。

遠くの空が徐々に晴れてきた。青空が少しずつ顔を覗かせ、それに呼応するかのよう、小鳥たちが鳴き声を上げている。

このリアリティの「それ」について考えることが最近多い。「それ」は、「全体性」もしくは「如性」などという言葉当てはめることができるが、言葉の外形はほぼほぼ問題にならない。それは歌い、それは指し示すということが大切だ。それこそが「それ」の原理であり、真理である。

「それ」について知っている人には、この意味が当たり前すぎるのだが、「それ」を知らない人にはその意味がわからない。直接体験及び体験の咀嚼がいかにか大切に物語っている。

実は今日は街の教会のオルガンコンサートに足を運ぼうと思っていた。だが、外出するのが少しばかり億劫であり、何より読みたい本があり、作曲実践を前に進めていきたいという思いがある。今日はコンサートに行くのをやめ、これから一時間ほどクリシュナムルティの教育思想に関する書籍を読み進めていこうと思う。

先ほどショパンに範を求めて作曲実践をした。作曲ノートを確認すると、ショパンに範を求めたのは12日振りだった。こうしたことがわかるのもノートに記録をしておいたおかげである。記録することの大切さと意義を改めて知る。

作曲ノートを見返してみても面白いのは、何かしらのサイクルに基づきながら様々な作曲家の間を行き来していることである。核となる作曲家はほぼ固定されているが、その作曲家の間を移動するサイクルが確認される。これはおそらく内側の感情エネルギーや創造エネルギーの流れと足並みを揃えたものと思われる。おそらく両者はシンクロナイゼーションしているのだ。この仮説を検証する方法は至って簡単で、交差再帰定量化解析(cross recurrence quantification analysis)を用いればいい。だが直感的に、それはそのような科学的な手法を用いて検証するまでもないことだとわかる。

---

科学はご丁寧にも様々な手法を駆使して後付けで様々な現象を説明しようとする。自分の中で説明が完了しているものについてはあえてそのような手法を用いて検証することを今後は一切しないようにする。

ショパンの曲を参考にして改めて感じたのは、スキヤフォールディングの意義である。過去の偉大な作曲家が残した楽譜は、今の私にとって最良のスキヤフォールディングである。楽譜があるおかげで、小さな自己に留まった生身の人間の師はいらない。今日は午後からモーツァルトとバッハに範を求めて再度作曲実践を行うと思う。

空が徐々に晴れてきた。先ほどよりも青色が増してきた。今日もここからより一段と充実した日になるだろう。フローニンゲン:2018/7/14(土)10:20

#### 2840. クリシュナムルティの教育思想:脳の包括的な活用と自己との一体感

早朝にテレマンとショパンに範を求めて作曲実践を行った後、“J. Krishnamurti: Education and the Significance of Life (1953)”の初読を開始した。本書はクリシュナムルティが自らの教育思想を語っているものである。一言で述べれば、本書には随所に洞察に溢れる教育思想が散りばめられている。それら一つ一つに対してしばしば考え込んでしまうことがあった。

教育哲学への関心は増す一方であるが、同時にそれを学術機関の中で探究することには少々ためらいがある。学術機関の閉鎖性とそこでは語られることの許されないものが不可避に存在していることが、そのようなためらいを私にもたらす。いずれにせよ、教育哲学について自ら探究を行い続けていくことは確かだろう。それほどまでにこのテーマは私にとって重要さを持っている。

クリシュナムルティの書籍を読みながら、改めて考えさせられたのは教育の話題を超えて、自己の成熟は年齢によってもたらされるのではなく、自己理解によってもたらされるという点である。自己を理解することがいかに難しく、そして自己理解の涵養に向けた実践を継続させていくことがいかに大切か。何となれば人は自己理解を深めていくことに怠惰なのだから。

これから昼食を摂り、再び読書に取り掛かった後に仮眠を取り、その後に作曲実践に従事しようと思う。作曲をしている最中、そして作った曲を聴きながらデッサンをしていて思うのは、それらの実

---

践が脳の様々な部位を刺激しているということだ。言い換えれば、それは日常なかなか活性化されない部位を強く刺激している。実際に曲を作ること、そして絵を描くことは、それこそ学術的な専門書を読んだり、論文を書いたりするときとは異った脳の部位を刺激している。

クリシュナムルティの教育観の中では、自らの存在が持つ包括性を養っていくことの大切さが強調されている。精神的な次元ではなく、まずもって身体的な次元においても、脳を包括的に育てていくことは大切なように思われる。現代社会で単に生きているだけではいかに脳の活用部位に偏りがあることか。それを思うと、まずもって身体的な次元において芸術活動に従事することの有益さを実感する。

その次に、作曲やデッサンの実践においていつも感じている独特の多幸福感について考えていた。やはりこれも脳の活性化と切っても切れない話だろう。創造的な活動に従事することによって、創造性を司る脳の部位が活性化され、それは思考や感情を司る脳の部位も活性化する。脳全体が活性化されることに伴い、無上の充実感を感じ、どこか自分が自分と完全なまでに一体となつていて感じるがよくある。まさに自己との完全な一体感は、脳の包括的な活用と密接に関わっており、この一体感は人生の充実さを生み出していく。そのようなことを改めて考えていた。フローニンゲン：2018/7/14(土)12:19